

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2014年6月12日放送

「第57回日本医真菌学会② シンポジウム6-2

皮膚糸状菌症の疫学：最近の動向」

帝京大学溝口病院 皮膚科
教授 清 佳浩

皮膚真菌症の疫学調査 協力施設

2011年の皮膚真菌症の疫学調査は次に述べる12の協力施設、及び担当者において行われました。(敬称略)

笠井皮膚科 笠井達也 (多賀城)
まるやま皮膚科クリニック 丸山隆児 (東京)
帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科 清 佳浩 (川崎)
新潟県済生会三条病院 奥山長三郎 (新潟)
揖斐総合病院皮膚科 藤広満智子 (岐阜)
金沢医科大学皮膚科 望月 隆 (金沢)
大阪市立大学 小林裕美 (大阪)
鳥取大学医学部皮膚病態学 山元 修 (鳥取)
山口大学 武藤 正彦 (山口)
産業医大皮膚科 小林美和 (北九州)
楠原皮膚科 楠原正洋 (九州)
琉球大学皮膚科 上里 博 (沖縄)

5年ごとの疫学調査参加施設の内訳

爪白癬の原因菌種については帝京大学医真菌センターにて realtimePCR 法を用いて行わ

れました。

疫学調査年次施設	大学病院	総合病院	開業
1991	10	6	1
1996	7	7	1
2002	7	4	5
2006	8	3	5
2011	7	2	3

日本医真菌学会疫学調査委員会はこれまで 1991 年から 5 年ごとに 5 回調査を行いました。その参加施設は表のごとくで大学病院が減少し、総合病院も減少しました。このことは培養、鏡検、同定などを行い、皮膚真菌症をしっかりと診断治療する施設が減少していることを意味します。開業医はそれまで大学病院や総合病院に勤務していた先生達が開業したもので、その結果大学や総合病院から徐々に真菌症の専門医が減少しています。

今回の調査期間は 2011 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までの 1 年間で、上に挙げた施設を受診した新たに診断された真菌症患者を集計しました。各調査担当施設には統一調査用紙を送付し、疾患ないし、病型、年齢、性別、受診月を記録しました。また、皮膚糸状菌症については原因菌の培養成績、菌種別頻度を調査しました。なお、施設の中には培養が実施できない施設や、全例での培養がなされなかった施設も含まれますが、地域による疾患の頻度の違いを調査することに主眼をおいたためであります。結果は、可能な限り excel の表にしてもらい集計の簡略化を図りました。集計数が合致しない例は少数含まれています。筆者の入力ミスがその一因となっていることを御了承願います。

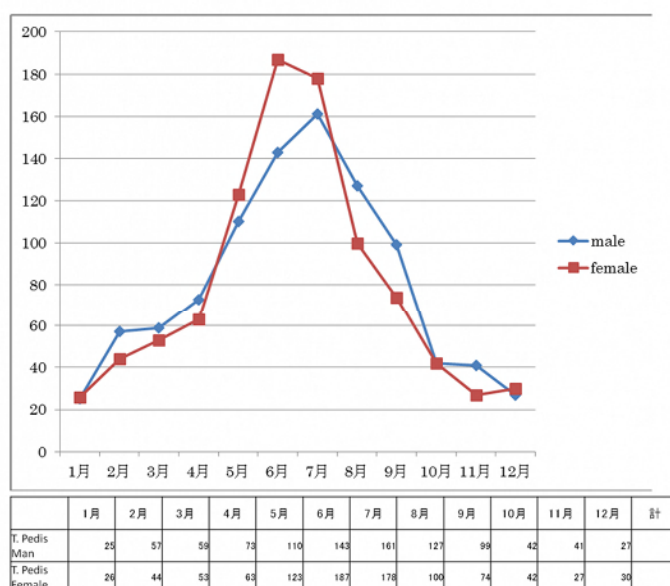
2002 年の疫学調査までは、初診患者に対する白癬患者の割合は 4%から 18%程度の開きでありましたが、今回の調査結果では頻度が施設によって 0.7%から 45%と大きなばらつきがありました。12 施設のうち大学病院に絞って検討してみると、施設によりやはり大きな違いがあることがわかります。白癬の患者数は 2002 年までは 1 施設あたりで年間 200 例以上と多数認められたのに対し、今回は少ない施設では 16 例、多くの病院で 100 例に達しませんでした。産業医大のように初診が全例紹介患者に限定されますと、真菌症の患者は大学にはほとんど紹介されないため症例数が減少します。私の病院では患者の訴えがあれば足を診察しますが、そうでなければマンパワーの問題から訴えがない部位の診察まで出来ないため、足白癬の症例は 80 例に過ぎませんでした。一方、金沢医大のように来院した初診患者のほぼすべての足を診察すると 433 例と高頻度に白癬が認められます。足白癬の総数は 1991 年 5941 名、1996 年 4901 名、2002 年 4813 名、2006 年 4679 名と徐々に減少しましたが、今回は 1463 名と激減しました。減少した一番の理由は多数の報告のあった施

設から違う施設への変更したためと考えました。すなわち、白線の総者数はそれほど変わらないと思われるのに病院を受診する症例が減少したのは、患者の受診しようという動機の減弱が一因であろうと考えました。

足白癬

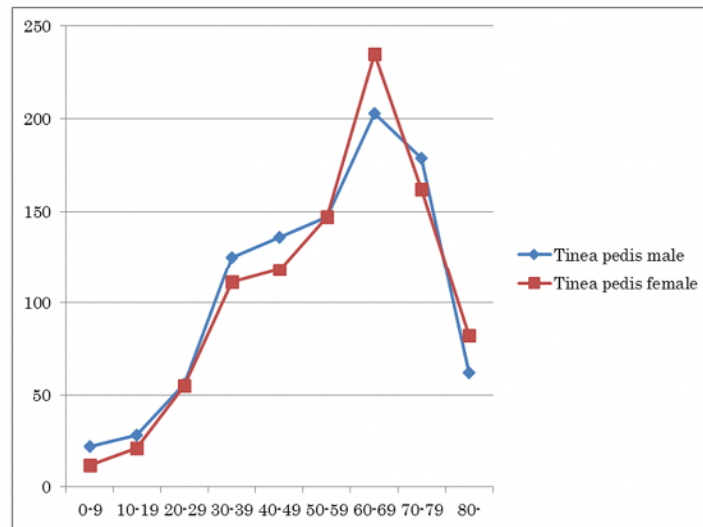
足白癬の季節変動については、ほぼ男女同様なグラフが得られました。すなわち 6 月から 7 月にピークが見られること、10 月から 1 月にかけては、きわめて少なくなることです。

足白癬の季節変動



足白癬の年齢別分布については、やはり男女ともほぼ同様のグラフとなりました。すなわち 20 代から 30 歳代に急速に増加して 60 歳代にピークを有するパターンです。

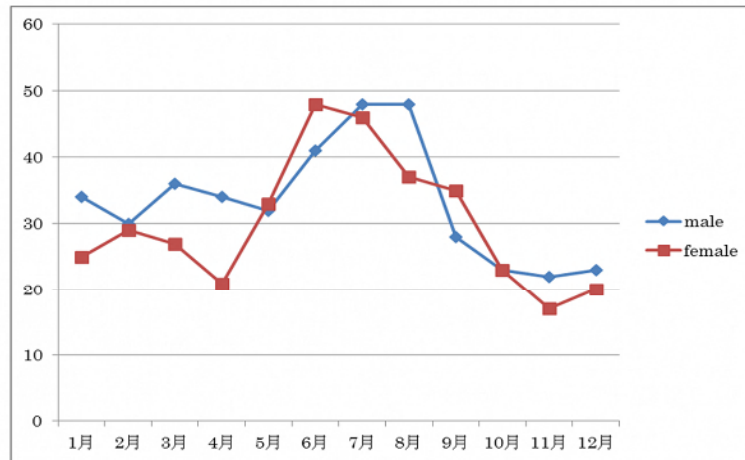
足白癬の年齢別分布



爪白癬

爪白癬患者は今回 780 例でありました。前回の調査では 2582 例であったのでやはり大幅に減少しています。この原因も患者の受診への動機つけが減少したものと考えました。爪白癬の季節変動に関しては足白癬ほどのピークではなく、さらに男女でわずかな違いも見られました。

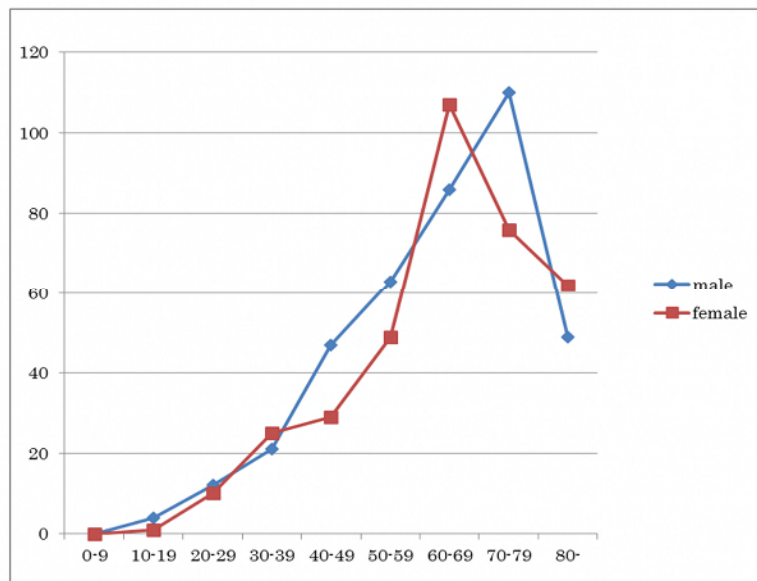
爪白癬の季節変動



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
male	34	30	36	34	32	41	48	48	28	23	22	23
female	25	29	27	21	33	48	46	37	35	23	17	20

爪白癬の年齢別分布については女性のピークは60歳代、男性のピークは70歳代とやや違いが見られました。

爪白癬の年齢別分布



爪白癬の菌種の同定については、はじめに述べたように帝京大学医真菌センターで一括して realtimePCR 法を用いて行いました。その結果、約 98%と高い確率で菌種の同定ができました。従来の培養法の陽性率は 20%から 40%です。これまでは皮膚糸状菌以外の通常の抗真菌剤の感受性の低い真菌が培養陰性例に多く含まれているものと思われていましたが、今回得られた結果から、白癬菌では *T.rubrum* が 75%、*T.mentagrophytes* が 15%という結果で、培養陰性だった菌は死菌ないしは増殖できない菌であったものと思われました。今回参加していただいた施設で爪白癬と臨床診断した症例ほぼ全例で菌の同定ができました。realtimePCR 法による同定法が優れていた結果ですが、適切な検体を採取した、今回の調査に参加してくれた施設の担当者の能力が優れていたことも示しています。

今回の疫学調査結果のうち爪白癬以外の起因菌種については *T.rubrum* は最多で約 80%、*T.mentagrophytes* 10%でありました。それ以外の菌についてですが、当初ほとんどの菌が海外から格闘家によって持ち込まれ、当初は格闘家に限定していた新型水虫とも呼称される *T.Tonsurans* は頭部から 5 株、体から 8 株同定されました。現在では格闘家と接点がない症例や小児、幼児からの報告も認められます。本菌は非常に感染力が強かつ頭部ではほとんど皮診の認められない症例すなわち無症候キャリアーが存在するため、わからないうちに感染が拡大する結果となりました。今後なお一層の *T.Tonsurans* 感染症に対する啓蒙活動を続けていかなければならないと考えています。

犬や猫から感染することが多い *M.Canis* は 5 株で以前より減少しましたが、野良猫の保菌率は高いとのことで、今後も注意が必要と思われます。土から感染する *M.gypseum* は 2 株と、やはり土と接触しなくなってきたため減少したと考えました。股部白癬から *E.floccosum* が 2 株培養されましたがこの菌は徐々に減少していくものと思われます。

カンジダの全症例数は 378 例で、男女の比率は全症例の平均で 1 : 1.4 でありました。これはこれまでの報告とほぼ同頻度であります。カンジダについては病型の推移についてお話ししますが、男女差が顕著な病型は以前からの報告と同様に爪囲爪炎、指間びらん症でありました。間擦疹は最も症例数が多い病型です。ただし男女差はあまりありません。おむつ部に生じる乳児寄生菌性紅斑は、紙おむつの改良によってずいぶん減少しました。

マラセチア症

マラセチア症は 152 例の報告がありました。癬風は比較的年間を通じて認められました。年齢は 10 代から 70 代までに渡って認められました。マラセチア毛包炎は 50 例の報告がありました。夏季に比較的多く認められ、年齢は 10 代から 40 代が中心と癬風に比べて若

年者に多く認められました。マラセチア毛包炎の男女差は女性では若年例が多い傾向がありました。

真菌症の疫学調査の結果のまとめ

病院を受診する患者が減少している。

水虫はやはり夏に来院数が多い。

爪白癬の原因菌は通常の水虫の原因菌とほぼ同じであった。

トンスランス感染は徐々に国内に広まっている。

カンジダ症は減少傾向にある。

マラセチア症のうち、マラセチア毛包炎が専門科の中で、より認識されてきた。

以上がまとめです。